



国際協力NGOにとっての 組合員現地視察の意義と課題

さきがわ まさし
崎川 勝志

●エファジャパン・ベトナム駐在員（海外事業担当）

エファジャパンは、1994年に自治労がベトナム、ラオス、カンボジアの3カ国で始めた国際支援活動の実績と経験を引き継ぎ発展させ、子どもの権利を実現するために、2004年に設立された国際協力団体（NGO）である。エファジャパンのように労働組合と協働して国際支援活動を行っているNGOにとって、労働組合の運動の一環として継続的な支援活動を展開していくことは重要であり、それは責任を持って長期的な視点で現地の人々を育てていくことにもなる。しかし、労働組合では役職員の代替わりもあり、NGOが労働組合と継続的な協力関係を維持し、効果的な事業を実施していくには、役員個人との関係だけでなく、組合員全体との関係が重要である。その点でも、支援者である組合員に現地を良く知ってもらうための視察は大事であり、最終的にはこれを各組合員の職場での草の根レベルの理解促進に繋げていくことが期待される。そこでNGOと労働組合との連携の強化を一層図るためにも、私個人の経験を通して、組合員の現地視察の意義と課題について述べたいと思う。

エファジャパンが現地で視察を受け入れるのは主に自治労組合員であるが、他の労働組合の組合員の視察も時節受け入れている。一般的に視察で訪問する場所としては、今後支援を計画中、あるいは実際に支援を実施中の現場の他、他の労働組

合などが支援している現場を5～15人の団体で視察することが多い。

まず、意義について考察する。一番に挙げられるのが、やはり支援者である組合員の人達が支援を行う予定（あるいは実施中）の現場を訪問することで、支援金がどのように使われる（あるいは使われている）のかを、実際に見て頂き、国際協力への理解を深めてもらえることにある。弊団体では、支援を予定している（あるいは実施中）の自治労各県本部には、報告書と一緒に写真や動画で現地の様子を紹介するようにしているが、それでも現地を視察した組合員からは「現地に行ってみると見ないのでは全然違う」という感想を様に聞く。実際、現地を視察する前と後では、組合員の支援に対するコミットメントも明らかに変わり、現地視察前は私のほうから一方通行で支援計画の提案や実施中の支援の様子を伝えるだけだったのが、現地視察後は一緒に支援内容について考えるとといった姿勢への変化がよく見られる。役員の中には、仕事として立場上来なければならない方もいる。「正直、蚊や香菜、暑さが嫌で現地には来たくありませんでした。しかし、現地で支援の様子を実際に見た今は、本当に来て良かったと思います。」というような感想を述べる方も少なくない。現地視察の間は、出来るだけ支援現場の子ども達と交流を持つ機会をアレンジするよう



自治労の支援により設置された
図書館で交流する子ども達と組合員

にしている。実際に子ども達とゲームをしたり、運動をしたり、工作活動をすることで、支援をしている子ども達を身近に感じ、愛着を持ってもらうことができる。言葉が通じなくても、身振り手振りや見よう見まねで、毎回、組合員と子ども達は打ち解けて交流を楽しんでおり、子ども達との交流が「現地に来て良かった」と組合員に思ってもらえる大きな要因ではないかと思う。

また、NGOは市民への開発教育もその社会的役割として担っており、組合員の現地視察は開発教育の一つの形態とも言える。自分達が支援している場所を訪問することで、問題意識が広がり、例えばその日の夕食のレストランで、途上国で貧困や社会問題が生じる原因やその改善策について組合員同士が自然と議論しあっている姿を見かけることも珍しくない。現地を視察した後、休暇中や退職後にリピーターとして個人で戻ってきて、ボランティアとして活動したり、弊団体の活動に協力してくれる人もいる。視察の間、数日間付き添うことで、現地の駐在員と支援する組合員の間に信頼関係が生まれることも、NGO側にとって今後の事業を展開しやすくなる一因となる。

一方で、組合員による現地視察をより意義深いものにするには次のような課題がある。一つは、現地視察に参加するのは組合員の中でもごく一部であり、日本に帰ってからそれをどのように他の

組合員に伝え、現場で感じたことを広げ浸透してもらうかという課題である。自治労の各地連・県本部で現地視察を実施するときには、視察後に参加者が各職場に戻ってから職場の人達に視察で感じたことを共有してもらえるよう、職種や年齢などを考慮して参加者を募ることも少なくない。また、各参加者が感想を書いて編集した報告書を作成し、大会や集会で配布する地連・県本部もある。しかし、それでも組合員数全体から見ると、自分達の地連・県本部がどのような国際協力活動を行っており、視察にも来ているということを知っているのは一部の組合員にとどまっている。

もう一つの課題は、弊団体はベトナムでは障がい児支援、ラオスでは図書支援、カンボジアでは非公式教育の支援を行っているが、視察後に個人でリピーターとして熱心に支援に関わってくれるのは、支援分野と関連のある職場で働いている組合員がほとんどであるため、当該分野で経験やスキルを持ち合わせていない他の組合員は時間が経つにつれモチベーションが低下していくことである。支援の裾野を広げるためにも、今後は、まずは視察に来た組合員の関心の維持に努め、次にこれらの組合員の協力を得ながら自治労の行っている国際協力活動を他の組合員に知ってもらって啓発していくといった段階的な方法などを模索していくことが必要であろう。